

きょういく さど



令和2年11月20日
第73号
佐渡市教育委員会
学校教育課

コロナ禍における大人の使命

学校教育課長 濱田 晴明

「政府は何もしてくれない」

「周りの人は、助けてくれない」

コロナ禍において、「〇〇してくれない」と嘆く「くれない族」が増えていると言われています。そのような大人の言動を見て、不安になっている子どもが多いです。

さて、世の中には、「変えられないこと」と「変えられること」があります。

コロナの状況は「変えられないこと」です。どんなに嘆いてもコロナ発生という事実は「変えられないこと」です。また、他人も同じように「変えられないこと」です。（変えられない他人を変えようとするから、そこに不満やストレス、人間関係の乱れが発生します。）

「変えられること」は、自分です。例えば、コロナにより嘆いていた学校行事の精選などを「コロナによる教育活動や学校行事の見直しが児童生徒への負担軽減や教職員への働き方改革へ繋がった」と、自分自身の考え方を変えることができます。難しく考えず、簡単なことからやりませんか。がんばっている自分自身を賞賛しながら自分の機嫌を取る、他へ責任転嫁しない生活を送るなどから始めてみませんか。

子どもたちは、大人の言うことを聞かない・聞けないことが多いです。しかし、身近な大人のやっていることを真似します。脳には真似する細胞・ミラーニューロンがあるからです。

自分を変え、明るく元気に生き抜いている大人の姿を、未来を担う子どもたちに示していきませんか。それが我々大人の使命と考えます。

子どもたちに説明できないことはしない

管理主事 森 和人

2学期がスタートした8月下旬、校長会の中で非違行為根絶に向けた危機管理研修会が行われました。講師として下越教育事務所長の丹後様及び学校支援第1課長の相澤様をお迎えし、交通加害事故防止に絞って研修しました。

丹後様からは、教職員一人一人の当事者意識を高め、「非違行為は必ずなくせる、根絶させる」という強い信念が大切であることを学びました。相澤様からは、自分事として交通加害事故の根絶を考えるブレン・ライティング法を用いた研修を実施していただきました。「前の車は〇〇するだろう」という思い込み運転を無くし、「〇〇するかもしれない」と思う危機予測の大切さを教えていただきました。

この研修を通して、多くの非違行為は「大丈夫だろう」と都合よく安易に考える、自己管理の甘さから発生するものだと感じました。例えば、「もう酔いが覚めたから運転しても大丈夫だろう」や「個人情報のUSBを黙って持ち帰っても分からないだろう」などです。ちょっとした心の甘さから、本人と学校は児童生徒や保護者からの信頼を失い、本人の家族や同僚に大きな迷惑をかけてしまうのが非違行為です。

ある校長先生は、「児童生徒、教職員とその家族の幸せのため、当事者意識がもてる働きかけをしたい」と感想を残しました。教職員一人一人の自覚が非違行為根絶の鍵となることは、間違いありません。



地道な継続こそ人権感覚を育てる

教育指導主事 庄山佳代子

昨年度末から、新型コロナの感染拡大により社会のあり方が大きく変化しました。学校でも様々な教育活動が中止・変更を余儀なくされました。また、感染された方や医療従事者に対する差別発言がSNS等を通して広がりました。感染を恐れるあまりに、差別する自分の心を抑えられなかったり、差別であることに気がつかなかつたりしたのではないかと推察されます。あつてはならないことです。

今年度は「佐渡人権展」が中止となり、大事な教育の機会を失いました。そこで、12月に予定されている「人権週間」の取組を確実に実施していただきたいと思います。昨年度の取り組みを紹介しますので参考にしてください。

- ①道徳授業で「生きるIV」の教材を使い、結婚差別の問題から人間尊重の精神を学んだ。
- ②文化の違いに関する資料を読み、「文化が違う友達とどのようにかかわればよいか」についてp4cの手法を用いて話し合った。
- ③「ありがとうの木」「やさしさの木」「いいねの木」を設け、「友達にされてうれしかったこと」「友達にしてあげたいこと」「友達のいいところ」を書いて掲示し、紹介した。

人権週間の取組と共に、同和問題の教材を使用した道徳の実践もお願いします。人権教育、同和教育に関する教育活動を地道に継続していくことで、子どもたちの人権感覚を育てていくことができると考えます。

「はじめの一歩」を踏み出そう（学校のICT化）

指導主事 小田 俊裕

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、GIGAスクール構想は前倒しとなり、今年度一気に学校のICT環境の整備が行われています。高速無線LANネットワーク工事を始め、一人一台端末の整備、遠隔授業のためのWebカメラ・スピーカーフォン等、学校におけるICT環境は急激に変わります。そんな中、「ICT機器が入っても、自分は苦手だから…」と知っている先生も多いのではないのでしょうか。

先日、新潟大学付属新潟小学校の椎井慎太郎先生を講師に佐渡総合教育センター主催のICT活用研修講座が行われました。そこでは一人一台のタブレット端末を使用した授業実践の紹介と、学校におけるICT化の進め方について方向性をご教示いただきました。

授業実践の紹介では、メモ、写真、音声、VTR等々、これまで教師が様々な道具を用いて授業準備を行ってきたことを、一人一台端末一つで効果的に児童生徒に示す方法や、自分の考えをタブレット端末の中で友達と共有、説明し合う姿等、具体的な授業場面での活用方法を紹介いただきました。ICTの活用により授業や授業準備の効率化が可能となっていました。

また、学校におけるICT化は、「すべての学習活動が一気にICT化することはない。従来の教育とICTを活用した教育を効果的に組み合わせることが大切である」と指導いただきました。

学校のICT化は「計画を立ててから」とか「その効果を検証してから」とか言っていては進みません。まずはできるところから始めましょう。子どもたちも先生方も必ず「これいいな！」と思うことがあるはずです。得意な人も苦手な人もみんなで一歩を踏み出しましょう。

オリンピック・パラリンピック教育

10月26日(月)、27日(火)に真野小学校でオリンピック選手の右代 啓祐 選手(国士舘大学講師)をお招きしてオリンピック・パラリンピック教育を実施しました。新学習指導要領で示されている体育科の「見方・考え方」は「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点からとらえ、自己の適正等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」となっています。ぜひ、各校でもオリ・パラ教育に取り組んでいただき、運動に対する多様なかかわり方を学ぶ機会にしていきたいと思います。

